

【研究ノート】

中国青海省海東地区化隆回族自治州における 漢民族の儀礼棒に関する事例報告

上原 周子

1. はじめに

本稿では、中国青海省海東地区化隆回族自治州における調査から、筆者が採取した漢民族の儀礼棒に関する事例の報告を行う。本来、筆者はチベット族に関する研究を行っており、当地域に訪れたのも、その調査が目的であった。しかし、調査地の化隆回族自治州徳加郷および昂思多鎮は、チベット族の他にも回族や漢民族が雑居する地域であり、それらの民族の信仰状況などに関しても調査を行っていた。その途上で、漢民族の廟内に儀礼棒が安置されているのを発見したのである。

さて、筆者がこの儀礼棒に注目し、本稿でとりあげるのは、棒の形態や用途などに、オシラサマ信仰⁽¹⁾との共通性を見出したことに拠る。

筆者は修士論文のテーマとしてオシラサマ信仰を選択し、2003年から2004年にかけて青森県下北半島のオシラサマ信仰に関する調査を行った。その調査において、オシラサマ信仰が衰退しつつある現状を把握した(上原周子、2005:9-21)。例えば、下北半島では現在も多くのオシラサマが神棚などに祀られてはいるものの、実際にオシラサマの祭を実施していたのは34集落中6集落のみであった(2004年調査当時)。この衰退は下北半島だけの話ではない。かつてはオシラサマ信仰が分布する全域から1000体のオシラサマが集まったという青森県津軽郡弘前市久渡寺のオシラ大祭においても、2004年の大祭への参加者は100人程度であった。下北半島以外の地域でも、オシラサマ信仰は衰退しているのである。

ただ、オシラサマ信仰にはその起源や名称の由来など、いまだに多くの謎が残されている。さらに100年以上の研究史による膨大な資料が蓄積されている。それでいて現在、オシラサマ信仰に関する研究が盛んに行われているというわけでもなく、資料もまた有用されことなく蓄積されたままになっている。信仰の衰退とともに、研究対象としての興味も失われつつある。しかし、謎を多く残したまま、研究対象としての興味が失われてしまう前に、オシラサマ信仰研究に新たな活路を見出し、その謎を少しでも明らかにしたいと筆者は考える。さらに、その活路は国外の文化を視野に入れたところに見出せるのではないかと考えている。

これまでは民俗学の分野で研究が進められてきたため、国外の文化との関連が論じられることは僅かであった。2003年に刊行された『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』第2号(東北芸術工科大学東北文化研究センター、2003年)ではオシラサマ信仰研究の特集が生まれ、北方や南方の文化を視野に入れた論も著されたが(門屋光昭、2003)、それに続く研究の展開は、いまだみられていない。しかし、例えば、オシラサマの形態は棒であり、祭祀には民間宗教者の関与が多くみられる。そのように、儀礼の中で棒や柱が用いられたり、また民間宗教者が関与したりする事例は、北アメリカ大陸から北アジア、アフリカなど、世界の至るところに普遍的に存在する⁽²⁾。そのように、オシラサマ信仰には通文化的な視点から論じられる文化的価値があり、また、国外文化との事例比較といった通文化的な研究の余地があると筆者は考える。

以上、漢民族の儀礼棒に関する事例報告を本稿で行う背景には、オシラサマ信仰研究に新

たな活路を見出したいという筆者の考えがあり、また、その儀礼棒の事例には活路を開拓する契機としての資料的価値があると考え、報告するに至った次第である。さらに言えば、そのような価値があると判断したのは、漢民族の儀礼棒がオシラサマ同様、儀礼に用いられる棒であり、また民間宗教者がそれを用いるという特徴を有しているためである。

ただ、もしこれが中国ではなく米国や西欧の事例であれば、報告することは考えなかっただろう。前述の通り、オシラサマ信仰研究において、北方文化や南方文化を視野に入れたものはこれまでもあったが、中国文化との関連を論じたものは、ほぼ皆無であった。しかし、オシラサマの由来譚として語られる馬娘婚姻譚⁽³⁾が、中国の『搜神記』に収録されている説話⁽⁴⁾を基にしたものであることは、これまでも指摘されてきた（今野野輔、1966：145 - 149）。また、中国は日本の隣国であり、かつては天平時代という時代区分が形成されるほどの影響を、中国から受けた過去が日本にはある。このように、中国文化との関連が論じられても不思議ではない環境に有りながら、従来では論じられるところがなかった。それもまた、筆者がこの儀礼棒を本稿でとりあげる理由の1つとしてあげられる。

以上から、漢民族の儀礼棒に関する事例を報告したい。その前に何故、棒の名称を本稿では儀礼棒とするかについての説明を行う。それから調査地について概観した後、事例を報告する。最後のまとめでは、今回調査を行った3集落の儀礼棒の共通点から、その特徴について論じたい。ちなみに、オシラサマ信仰との比較分析および考察を行わないのは、儀礼棒に関する調査がまだ途中の段階であり、分析と考察を行うだけの水準に達していないと判断したことによる。よって、本稿では事例報告と簡単なまとめだけに留めたい。

2. 棒の名称について－神柱？それとも神主？－

事例報告を行う前に、儀礼棒という曖昧で、非固有的な名称を本稿で用いる理由について述べておく。

棒の名称について、調査からは神柱であるという回答得た。しかし、これに関しては別の名称である可能性が考えられるため、本稿では用いないことにした。それには以下、いくつかの理由があげられる。

まず、神柱に関する文献調査において、漢民族が神柱を用いるという事例は皆無であり、確認することの出来た全ての事例が少数民族によるものであった。具体的には、主にタイ族、モソ族、土族に関する文献から、神柱に関する記述を確認した。ここから、神柱は漢民族の文化に普及しているものではないことが明らかになった。

さらに、少数民族の神柱と漢民族の儀礼棒には、用途などの点において、かなりの相違がみられた。まず、タイ族の場合では、家神を代表するものとして神柱を祀る。王子柱と公主柱の2体があり、その家の男女の祖先とされる。男性が亡くなった時には王子柱、女性が亡くなった時には公主柱の上で遺体を洗ったという事例もある（章立明、2001：58／高发元主編、2001：198）。形態に関する言及はされていないが、上述した内容から神柱は、遺体をのせることが可能な大きさであると考えられる。また、モソ族では神柱ではなく、女神柱に関する事例があった。各戸の居間にある囲炉裏には女神柱が立てられており、13歳の成人式の際、少女は女神柱のそばに立たされ、母親に新しい衣服を着せられる（劉学朝編著、朱新建・王武雲共訳、2000：182）。女神柱の形態や機能については記載がないため、不明である。土族では、未亡人、あるいは鰥夫が故人となった時に掘られる墓穴に、神柱が入れられる。その形態は逆T字型であり、基底となる横長の部分には故人の名前が書かれる。そして、棺桶が墓穴に安置さ

れる際に、神柱もともに入れられる。これは先祖の魂が墓穴に移動したことを象徴しており、つまり神柱が魂の依り代として用いられている (Kevin Stuart and Hu Jun, 1992 : 77)。このように、今回調査を行った漢民族の儀礼棒とは、形態においても、その用途や用いられる場面においても、かなりの相違がみられることが、文献調査からは明らかになった。

また、今回調査を行った儀礼棒が各集落の廟に祀られていたことから、神柱ではなく、神主である可能性が考えられる。漢民族の廟とは基本的に先祖の御霊屋であり、また関羽や孔子といった中国史上の重要人物も祀られる。先祖の御霊屋ということから、廟には通常、位牌が安置されるが、その位牌を中国語では神主と称する。すなわち位牌である神主は、祖先の霊の依り代としての機能をもつ。元々、神主は頭蓋骨であったが、次第に木片や石製の神主が普及するようになってきている (加地伸行、1994 : 37)。ここで注目したいのは、声調の違いはあれど、神主と神柱の中国語発音が同じということである。神主の拼音は shénzhǔ、神柱の拼音は shénzhù となる。ここから、神柱ではなく神主の間違いなのではないかという可能性が生じる。ただ、現段階の文献調査からは、漢民族の儀礼棒と同じ用途で用いられる神主の事例を確認することができていないため、断定することはできない。

以上の理由により、棒の名称に神柱を用いるのは控え、儀礼の際に用いられる棒という点から、本稿では儀礼棒と称する。なお、この名称の問題については、現地調査および文献調査の継続を通し、今後明らかにしたい。

3. 調査地の概観および漢民族の歴史的背景

ここからは本題に戻り、まず調査地である化隆回族自治州徳加郷および昂思多鎮について概観する。さらに、調査地における漢民族の動向に関する歴史的背景についてまとめたい。

3-1. 調査地概観

化隆回族自治州は中国青海省海東地区に属し、地区内では中心よりやや南に位置する (地図参照)。県都は巴燕鎮で、総人口は 2003 年の統計で約 23 万人である (中華人民共和國民政部編、2005 : 163)。県内には 6 の鎮と 13 の郷があり、そのうち 4 つが藏族郷 (チベット族が多く居住する郷) である (青海省基礎地理信息中心地図院・青海普金科貿有限公司編制、2005 : 39 - 40)。

海東地区は青海省の中でも極東部に位置しており、その東は甘肅省との境界に接する。また、西は青海省黄南藏族自治州尖扎県に接する。化隆県その他、平安県、楽都県、互助土族自治県、民和回族土族自治県、循化撒拉族自治州が海東地区に属し、各県称からも明らかのように、回族や土族、チベット族など、多数の少数民族が地区内には雑居する。特に、化隆回族自治州は回族の勢力が強く、県内の至るところに清真寺 (イスラム教の礼拝堂) が建てられている。少々古い統計ではあるが、1985 年の時点で県内における回族の人口は 92187 人であり、チベット族や漢民族など、県内に居住する他の民族と比較して最も多い。しかし、当県は本来、チベット族が居住する土地であった。回族は元代以降に他地域から移住してきた民族であり、その後、通婚や改宗を通して人口を増やしていった (化隆回族自治州地方志編纂委員会編、1993 : 658 - 659)。

漢民族の儀礼棒についての主な調査を行った徳加郷および昂思多鎮は、県都の巴燕鎮よりやや北西に位置しており、回族の他、チベット族や漢民族、土族など、やはり多数の少数民族が雑居する地域である。

徳加郷は昂思多鎮の北に位置し、海拔 2600mから 3900mの高さにある。1985 年末で、管轄する行政村は 13 村、人口は 8072 人、人口における民族構成は漢民族が 3971 人、藏族が 2320 人、回族は 1772 人である（化隆回族自治州地方志編纂委員会編、1993：122）。

昂思多鎮は、海拔 2550mから 3500mで、地勢として北が高く、南が低い。1985 年末で、管轄する行政村は 19 村、人口は 9630 人、人口における民族構成は、回族が 5116 人、漢民族が 2971 人、チベット族が 1517 人であり、人口の半数以上が回族となっている。鎮政府は沙吾昂集落にある（化隆回族自治州地方志編纂委員会編、1993：114）。

前述の通り、徳加郷も昂思多鎮も本来はチベット族の土地であったが、特にジェンザ（現尖扎県）と称する地区の一部であり、主に放牧地として使用されていた。その名残は当地域の著名な建築物であるジェンザ・マニカン（チベット語で、ジェンザにある経堂の意）という名称にもみることができる。それが清代以降、回族と漢民族が続々と増加し、荒地を開墾し、集落を築くようになった。そのため、昂思多鎮では他地域に移住するチベット族が増加した。また、元は半農半牧を主生業としていた地域であったのが、1950 年代の人民公社体制における私有財産としての家畜の没収などから、次第に主生業が農業へと移行した（化隆回族自治州地方志編纂委員会編、1993：114、123）。さらに現在では中国の経済発展に伴う現金収入の必要性から、出稼ぎに出る人が急増している。

このように、化隆回族自治州ないし、徳加郷、昂思多鎮もまた、その地域形成において、チベット族が居住していた土地であったところに、回族や漢民族が移住してきたという歴史的背景を有する。

3-2. 漢民族の動向に関する歴史的背景

現在、漢民族は県内 21 の郷鎮に分布しており、中でも巴燕、加合、二塘、謝家灘、昂思多、扎巴、查甫、雄先、群科、甘都、徳加などの鎮や郷に集住する（化隆回族自治州地方志編纂委員会編、1993：661）。

海東地区に、漢民族が居住するようになったのは、漢神爵 61（紀元前 61）年に趙充国が河湟で起きた羌の反乱を制定した際に、1 万人の漢民族が駐屯したところに始まる。特に、化隆県における漢民族の定住については、隋朝時代に現在の貴徳県、および化隆県を包含する、当時廓州と称されていた土地に、大量の漢民族の罪人が連れて来られたところに始まる。

現在の化隆県に居住する漢民族の多くは、祖先の出自を南京珠玑あるいは山西洪洞県であると説明する。その祖先たちは明代以降、数百年に渡って続々と化隆県に移住してきた。しかし、移住の理由は様々であった。まず、生活必需品を売買、あるいは生産するために移住してきた行商人や手工業者があげられる。また、駐屯したまま退役し、定住した清朝の軍人もあげられる。周辺地域から飢饉を逃れてきた人、流人などもいた。1985 年末の県内の漢民族の人口は、44793 人であり、そのうちの農業従事人口は 90%以上を占める（化隆回族自治州地方志編纂委員会編、1993：661 - 663）。

徳加郷および昂思多鎮に居住する漢民族もまた、農業を主生業とする。今回の調査では、当地域に散在する 10 の集落（徳加郷で 7 集落、昂思多鎮で 3 集落）で漢民族に対する調査を行ったが、そのうちの 6 集落における漢民族の祖先が、南京からの移住者であった。他には県都の巴燕鎮が祖先の出自としてあげられる。

漢民族が居住するようになった年代は、集落ごとに異なる。最も古いところでは 800 年以上前、最も新しいところでは 1953 年以降であった。ただ、10 集落のうち 4 集落が 1930 年代

以降の移住によることから、当地域における漢民族は比較的近年、増加したといえる。

以上、化隆回族自治州及び徳加郷、昂思多鎮における漢民族の歴史的背景について述べた。ここから現在、当地域に居住する漢民族の文化には、移住前に居住していた土地の文化的背景が当然存在すると考えられる。しかし、当地域の漢民族は他地域からの移住による人々ばかりではない。1950年代頃、チベット族から漢民族へと民族籍を変更したという事例も、調査から聞くことができた。ゆえに、元は他の民族であった漢民族も、現在の漢民族の中には混在している。それはまた、当地域における漢民族の文化について、考慮すべき背景の1つである。

4. 事例報告

ここからは、3集落で行った漢民族の儀礼棒に関する調査結果を報告する。具体的には徳加郷尕什甫集落、昂思多鎮紅卡哇二集落および梅加集落で調査を行った。このうち儀礼棒を実際に見ることができたのは、尕什甫集落と紅卡哇二集落である。梅加集落での事例は、聞き書きのみによる。調査は通訳者を介して行った。その際に用いた言語は中国語である。通訳者を介した理由には、筆者の中国語が調査をするまでに至らないこと、また、当地域の中国語には青海省独自の方言が強くみられることがあげられる。

ここで少し、当地域に居住する漢民族の信仰状況について述べると、仏教を信仰している場合がほとんどであり、道教を信仰している集落は1つだけであった。ただ、今回漢民族の調査を行った10集落全てに、漢民族の他、チベット族が居住しており、仏教を信仰することにはその影響があると考えられる。また、漢民族独自の信仰としては、三国時代の将軍である関羽への信仰が厚く、各集落の廟に祀られている。関羽が祀られている廟は一般に関帝廟と称され、集落における漢民族の信仰活動を行う場所としても用いられる。10集落のうち、集落内に廟を持っているのは6集落であったが、その全てが関帝廟であった。

以下、集落ごとに事例を報告する。まず、各集落について概観した後、関帝廟および儀礼棒に関する調査結果を報告したい。



写真1. 徳加郷尕什甫集落の儀礼棒

4-1. 徳加郷尕什甫集落における事例

(1) 集落の概観

省道202号に面したところから北に居住域が広がっており、202号を挟んで正面には白土庄集落、東隣には河滩庄集落がある。集落内には、漢民族とチベット族の2民族が同居している。2006年の調査においては、総戸数が約220戸、そのうち漢民族が約200戸、チベット族が約20戸であった。集落内では南側にチベット族の住居が多く、漢民族は集落の南北至るところに居住している。元はチベット族のみの集落であったが、漢民族も雑居するようになり、現在に至る。漢民族の出身地は化隆回族自治州都の巴燕鎮や南京であり、尕什甫村に居住するようになってから100年以上は経過している。主生業は農業で、主に小麦、油菜、

馬鈴薯などを作る。

(2) 関帝廟と儀礼棒

関帝廟は集落内でも北端に位置している。常駐している人などはおらず、手入れが行き届いている感じもなく、境内および廟内は雑然とした印象である。廟内には神像がいくつか祀られていたが、普段は見ることのできないように硝子窓の上に布が張られている。

儀礼棒は神像が祀られている廟内の硝子窓の中にはなく、硝子窓の前につくられてある棚上の隅に立てかけられている。その形態は、棒に赤やピンクの鮮やかな色の布が着せられているというものであった。ただ、2本のうち1本は、棒先を全て覆う形で布が着せられていたのに対し、もう1本は棒の先を3cmほど残したところから布が着せられていた。また、残された棒の先を見るに、棒の全体には何らかの文字が隙間なく書かれていると思われる。目、口、鼻のようなものは刻まれてはいなかった。全長は2本とも、30cmから40cm程度である。棒材は柏であり、円柱ではなく多角柱に削られていた。

これらの儀礼棒の用途としては、病気の治癒があげられる。例えば病人が出た家人が、赤い布を持って廟に行き、それを神柱に着せる。その後、家人に依頼された法師が、病人の患部を神柱で叩く。法師とは漢民族の民間宗教者であるが、靈魂や神意の託宣などは行わない。一般に女性ではなく男性である。

4-2. 昂思多鎮紅卡哇二集落における事例

(1) 集落の概観

紅卡哇二集落は鎮の中心地である沙吾南集落から南東へ、約4、5kmの地点に位置する。紅卡哇二集落の北隣には紅卡哇一集落があり、以前は紅卡哇という1つの集落を構成していた。現在、紅卡哇二集落にはチベット族と漢民族と回族の3民族が同居する。尕什甫集落と同様、紅卡哇二集落も元はチベット族の集落であり、そこに漢民族や回族が同居するようになった。総戸数約306戸のうち、チベット族の戸数は2戸、回族は4戸のみであり、圧倒的に漢民族が多い。漢民族の出自等については不明であった。また、チベット族の人口が僅少であるのは、農民として農村で生活するのが困難であることから、他地域に移住していったためである。主産業は農業であり、主に小麦、油菜、馬鈴薯などを作る。

(2) 関帝廟と儀礼棒

関帝廟は集落内の中心あたりに位置している。常駐の人はいるが、廟内の硝子窓や棚上、床は非常に薄汚れていた。廟内の中心には大きな関羽像が硝子戸内に祀られており、向かって左隣には財神像も祀られている。右隣の神像については、常駐の人もよくわからない様子であった。廟の祭日は農曆5月13日であり、羊肉と野菜の炒め物を参加者全員で食す。

儀礼棒については尕什甫集落のもの同様、神前の棚上に安置されている。大と小、2つの儀礼棒があり、大きいものは箱の中に安置されているが、小さいものは棚上の隅に立てかけられている。大きい儀礼棒には黒や赤の布が着せられている。棒先を覆う形ではなく、棒全体の半分以上が現れており、棒本体には漢字や数字が隙間なく書かれている。全長は50cm程度である。対して、小さい儀礼棒はピンクの鮮やかな布を着せられており、やはり棒先は覆わず、棒先15cm程度を残したところから布を着せられている。棒本体に文字は書かれていないが、煤けたように黒い。全長は30cm程度である。また、大小どちらも棒先が尖ったように削られて



写真 2. 昂思多鎮紅卡哇二集落の儀礼棒（大）



写真 3. 昂思多鎮紅卡哇二集落の儀礼棒（小）

おり、円柱形ではなく多角柱であった。

棒の用途は、大小によって異なる。まず、大きい儀礼棒は、主に天候をコントロールする儀礼に用いられる。例えば農作物に被害を及ぼすような天候時、法師が廟の境内で雲が晴れることを祈願しながら、儀礼棒を前後に振る。また、大きい儀礼棒は廟の中や境内でのみ使用され、廟外への持ち出しが禁止されている。一方、小さい儀礼棒は、病気の治癒に用いられる。病人の依頼を受け、法師が廟外に持ち出し、病人の身体および患部を叩くということが行われる。

農曆正月 15 日の晩にも儀礼棒が用いられる。この時は集落の漢民族が廟に集合する。法師もまた招かれる。法師は自分の人並みはずれた力を人々に示すため、湯の入った大きな鍋の中に石を投げ入れ、それを素手で取り出す。その後、儀礼棒を持ち、人々の身体を叩いてまわる。これは 1 年間の無病息災を祈願する目的で行われる。男女に関わらず、漢民族は参加する。ただ、大小、どちらの儀礼棒を用いるのかについては未調査であり、次回の調査で確認したい。

4-3. 昂思多鎮梅加集落における事例

(1) 集落の概観

梅加集落は紅卡哇二集落の南隣に位置し、紅卡哇二集落同様、チベット族、漢民族、回族の 3 民族が同居する集落である。チベット族が 37 戸、漢民族が 80 戸、回族が 136 戸であり、回族の戸数が最も多い。他の 2 集落と同じように、やはり元はチベット族の土地であり、そこに漢民族と回族が居住するようになった。漢民族の出自は南京と伝えられているが、居住するようになった時代については不明であった。主産業は農業であり、主に小麦、油菜、馬鈴薯を作る。

(2) 関帝廟と儀礼棒

梅加集落では廟と儀礼棒を直接観察することができなかつたため、ここでは聞き書き調査による結果のみを報告する。

廟は関帝廟であり、関羽が祀られている。そこに儀礼棒も安置されている。廟の祭日は農曆 5 月 13 日および農曆 9 月 9 日であり、羊肉を用いた祭を行う。まず、羊の内臓と頭を燃やし、香のように煙を焚く。他部位の肉は湯の中で茹で、それを儀礼棒の前に 30 分ほど供える。その後、参加者全員により、茹でた羊肉で直会を行う。

儀礼棒の主な用途は、病気の治癒である。例えば集落内で病人が出た時に法師を依頼し、廟内に安置されている儀礼棒で病人の身体を叩いてもらう。法師は医者と同じ役割を担う民間宗教者である。

以上、3 集落における儀礼棒の調査結果を報告した。最後にまとめとして、3 集落の儀礼棒の共通点から、その特徴について論じる。

5. まとめ

本稿では、中国青海省海東地区化隆回族自治州徳加郷および昂思多鎮における漢民族の儀礼棒をとりあげ、それに関する調査結果を報告した。そのまとめとして、ここでは各集落での儀礼棒の事例から、それらの共通点を指摘し、現在の調査段階にて抽出可能な儀礼棒の特徴について論じたい。

各集落の儀礼棒の形態に関して、細かいことを言えば多くの相違点があるが、どれも多角柱に削られた棒であった。その全長も巨大なものではなく、人間が手持ちで使用することのできる範囲の大きさのものばかりであった。また、どの儀礼棒にも布が着せられており、中でもピンクや赤などの鮮やかな色の布が多用されていた。

用途に関しては、主に病気を治癒する儀礼の際に用いられるという点を指摘することができる。また、その儀礼を指揮するのは法師と称される漢民族の民間宗教者であり、法師によって儀礼棒は病人の身体や患部を叩く道具として使用されていた。この病気の治癒儀礼に関する事例は、3 集落ともに共通して調査することが出来たものであり、儀礼棒の最も特徴的な用途であると言えることができる。

ただ、紅卡哇二集落の儀礼棒には大きさの異なる大小の儀礼棒があり、小さいものは上述のように病気治癒の際に用いられるが、大きいものは天候をコントロールする儀礼の際に用いられるものであった。そこでもやはり法師が天候をコントロールする儀礼を指揮するが、大きい儀礼棒は必ず廟の境内で使用されねばならず、そうした点でも小さい儀礼棒とは相違点がみられる。ここから、機能の異なる儀礼棒がいくつかあるのではないかとということが考えられる。

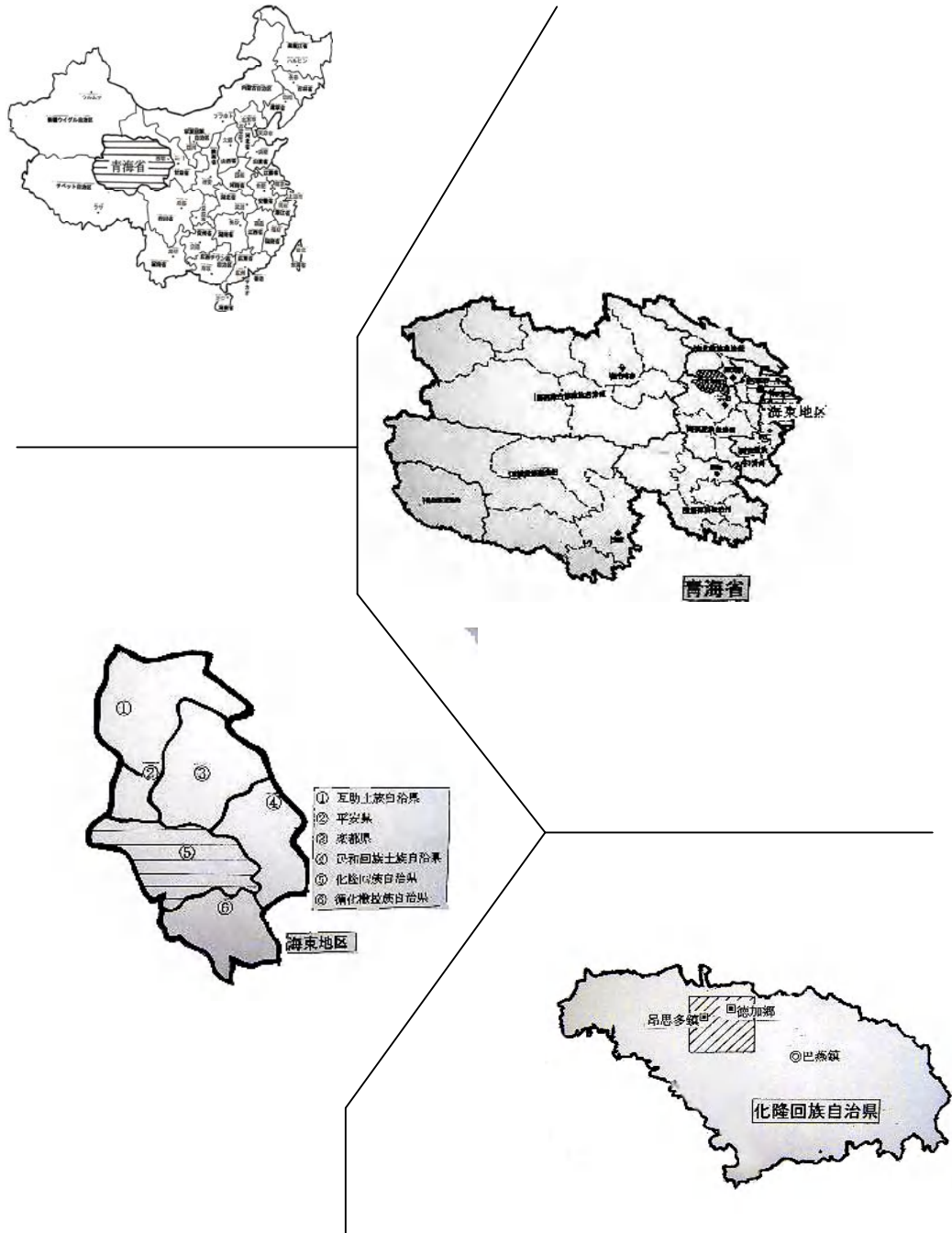
また、同じく紅卡哇二集落での事例だが、農曆正月 15 日の晩には、儀礼棒を用いて無病息災を祈願する活動が行われる。法師が参加者の身体を儀礼棒で叩くという、いわゆる御祓いがそこでは行われる。ゆえに、儀礼棒は病気の治癒や天候のコントロールといった臨時的に用いられるだけではなく、定期的にも用いられる。さらに、梅加集落では廟の祭日には直会を行う前に、儀礼棒に羊肉の茹でたものを供える。これらの事例は、儀礼棒が呪術的な道具として用いられるだけのものではないことを示唆する。

以上、現在の調査段階からは、化隆回族自治州徳加郷および昂思多鎮における漢民族の儀礼棒の特徴について、その形態は手持ちで使用することの出来る範囲の大きさに作られた多角柱の棒に布を着せたものであり、特に病気の治癒儀礼の際、法師と称される民間宗教者によって臨

時的に用いられる道具であると言える。ただ、红卡哇二集落の大きな儀礼棒や農曆正月 15 日の活動、また梅加集落の廟の祭日に関する事例を考慮すると、上述した特徴では言及しきれていない部分が、儀礼棒にはまだ多く残されていると考えられる。

今後、より多数の儀礼棒に関する詳細な調査を行い、この儀礼棒について明らかにしていきたい。

地図：上から中国全土、青海省、海東地区、化隆回族自治县



注：

- (1) オシラサマ信仰とは、主に東北地方に分布する民間信仰の 1 つである。オシラサマの神体は、棒に何重にも布を被せたものであり、通常は 2 体 1 対で家の神棚などに祀られる。その由来譚が馬娘婚姻譚という蚕の由来を説いたものであること、また棒に桑の木が多用されることから、蚕の神と言われるが、地域によっては家の神や目の神として祀られることも多い。オシラサマの祭はオシラアソバセなどと称され、そこでは古いや御祓い、直会が行われる。信仰的特徴の 1 つとして、女性あるいは女性の民間宗教者が祭祀に関わる点あげられる。またオシラサマを祀る家では、四足の肉を食すことがタブーとされている（上原周子、2005：序章）。
- (2) これについての事例は、枚挙に遑がない。北アジアおよび北アメリカでの儀礼と棒に関する事例は、大林太良『北方の民族と文化』の第 3 章「イナウの起源」（大林太良、1991：283 - 331）にまとめられており、大変参考になる。また、吉田禎吾教授還暦記念論文集『儀礼と象徴—文化人類学的考察—』（江淵一公・伊藤亜人編、1983）には、タイやアフリカでの儀礼に関する論文が収録されている。例えば、「タイにおけるタム・クワン（スー・クワン）儀礼—タイ仏教における二重構造の分析—」（小野沢正喜、1983：307、309）、「カンパにおける妖術と治療儀礼」（上田将、1983：137、139、141 - 142、147）などがあり、儀礼の中で棒や柱が用いられ、それぞれに民間宗教者が関与することが記載されている。
- (3) 馬と娘が恋に落ち、契りを結ぶ話である。また、娘の父親に殺された馬と、その馬の皮にくるまれて上空にさらわれていった娘が、その後、蚕として再生することから、蚕の由来譚としても語られる。これについては今野円輔『馬娘婚姻譚』（今野円輔、1966）に詳しい。
- (4) 中国の六朝時代（A.C.220～A.C.589）に干宝によって著されたものであり、志怪小説集というジャンルに属する。志怪小説とはその名の通り、怪を志（しる）した小説のことであり、そうした小説集が著された背景には当時、仏教説話や道教的色彩豊富な伝説が流行していたこと、また五行説が流行し、鬼や神、超現実的な靈威を人々が信じる環境にあったことがあげられる。六朝時代には多数の志怪小説集が著されたが、『搜神記』は比較的初期のものであり、そこに収録された説話には民間説話の典型的なものが多く含まれている（干宝著／竹田晃訳、2000：604 - 607）。ちなみに、オシラサマの由来譚である馬娘婚姻譚の基となった説話は、『搜神記』14 巻に収録されている。

引用文献：

- 中華人民共和国民政部編
2005. 『行政区划簡冊』. 北京市, 中国地図出版社.
- 江淵一公・伊藤亜人編
1983. 『吉田禎吾教授還暦記念論文集：儀礼と象徴—文化人類学的考察—』. 福岡県, 九州大学出版会.
- 干宝著／竹田晃訳
2000. 『搜神記』. 東京都, 平凡社.
- 高发元
2001. 『云南民族村寨调查 傣族—勐海勐遮乡曼刚寨』. 昆明市, 云南大学出版社.
- 門屋光昭
2003. 「オシラサマの研究—北からの視座、南からの視座—」. 『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』2：21 - 37.
- 加地伸行
1994. 『沈黙の宗教—儒教』. 東京都, 筑摩書房.
- 化隆回族自治州地方志編纂委員会編
1993. 『化隆县志』. 中国山西省陝西市, 陝西出版社.
- Kevin Stuart and Hu Jun
1992. Death and Funerals among the Minhe Tu(Monguor). *Asian Folklore Studies* Vol.51 No.1：67-87.
- 今野圓輔
1966. 『馬娘婚姻譚』. 東京都, 岩崎美術社.
- 小野沢正喜
1983. 「タイにおけるタム・クワン（スー・クワン）儀礼—タイ仏教における二重構造の分析—」. 『吉田禎吾教授還暦記念論文集：儀礼と象徴—文化人類学的考察—』（江淵一公・伊藤亜人編）, 299 - 324, 福岡県, 九州大学出版会.
- 大林太良
1991. 『北方の民族と文化』. 東京都, 山川出版社.

青海省基礎地理信息中心地図院・青海普金科貿有限公司編制

2005.『青海省地図冊』. 陝西省西安市, 西安地図出版社.

東北芸術工科大学東北文化研究センター

2003.『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』第2号, 山形県, 東北芸術工科大学東北文化研究センター.

上田将

1983.「カンパにおける妖術と治療儀礼」.『吉田禎吾教授還暦記念論文集: 儀礼と象徴—文化人類学的考察—』(江淵一公・伊藤亜人編), 133 - 160, 福岡県, 九州大学出版会.

上原周子

2005.「オシラサマ信仰に関する人類学的研究」(北海道大学平成16年度修士論文), 北海道.

劉学朝編著、朱新建・王武雲共訳

2000.「女人国—中国雲南省秘境瀘沽湖摩梭人母系大家族の実像」.『愛知学院大学教養部紀要』第48巻第3号: 175 - 206.

章立明

2001.「傣族文化当代变迁的思考」.『中央民族大学学報』第4期総第137期: 55 - 60.

(うえはら・ちかこ／北海道大学大学院)